人の心に光を灯す

ラジオで聴いた若いＯＬの話である。

彼女の生家は代々の農家。もの心つく前に母親を亡くした。だが、寂しくはなかった。父親に可愛がられて育てられたからである。

父は働き者であった。三ヘクタールの水田と二ヘクタールの畑を耕して立ち働いた。村のためにも尽くした。行事や共同作業には骨身を惜しまず、ことがあると、まとめ役に走り回った。

そんな父を彼女は尊敬していた。父娘二人の暮らしは温かさに満ちていた。

彼女が高校三年の十二月だった。その朝、彼女はいつものように登校し、それを見送った父はトラクターを運転して野良に出ていった。そこで悲劇は起こった。居眠り運転のトレーラーと衝突したのである。

彼女は父が収容された病院に駆けつけた。苦しい息の下から父は切れ切れに言った。

「これからはお前一人になる。すまんなあ……」

そして、こう続けた。

「いいか、これからは〝おかげさま、おかげさま〟と心で唱えて生きていけ。そうすると必ずみんなが助けてくれる。〝おかげさま〟をお守りにして生きていけ」

それが父の最期の言葉だった。

父からもらった〝おかげさま〟のお守りは、彼女を裏切らなかった。親切にしてくれる村人に彼女はいつも「おかげさま」と心のなかで手を合わせた。彼女のそんな姿に村人はどこまでも優しかった。その優しさが彼女を助け、支えた。

父の最期の言葉がA子さんの心に光を灯し、その光が村人の心の光となり、さらに照り返して彼女の生きる力になったのだ。